

## 連載 43 チャーリー・チャップリン『独裁者』（1940）恐怖と希望：一人二役の演説

冒頭に「独裁者ヒンケルとユダヤ人の床屋が似ているのは——まったく偶然である」と字幕が入るチャップリン『独裁者』は1940年10月にアメリカで公開されたが、日本で公開されたのは20年後の1960年だった。1940年日本の検閲は、ヒンケルそっくりな独裁者ヒットラーの側に立っていたからである。『キネマ旬報』誌面からも1939年の第二次世界大戦勃発以降、チャップリンの名前は姿を消す。

『独裁者』には、『モダン・タイムス』とはまた違った意味で、チャップリンのトーキー（映画における音・声）についてのこだわりがみられる。

冒頭近く、たれこめる硝煙で画面は白くくもり、ユダヤ人の床屋の兵士（チャップリン）の隊長を呼ぶ声だけが聞こえる。声と足音だけを頼りに進む兵士は、白い硝煙が消えたところで、敵陣のただなかにいることに気づいてあわてて逃げ出す。敵と味方の境界の消失、陣地の逆転、それに気づかなかった間抜けさは、音がもたらした皮肉として表現される。

ユダヤ人の床屋が、戦争の後遺症に苦しんでいるあいだに、独裁者ヒンケル（チャップリンの一人二役）が権力を掌握する。

ヒンケルは、意味の取れない架空の言語「トメニア語」で、派手な身振りをまじえて、民主主義の解体とユダヤ人弾圧を雄弁に主張する（らしい）。観衆は



ユダヤ人の床屋の演説場面

（はりぼての人形たちである）歓喜の声をあげナチス式敬礼によってこれに応える。ゲットーのユダヤ人たちには恐怖に色を失って、姿を消す。ヒンケルの演説は意味を表すのではなく、暴力の発現である。

映画の終局に、収容所を脱獄したユダヤ人の床屋は、ちょび髭と軍服によって、ヒンケルと取り違えられ、満場の観衆を前に演説するようにながされる。そこで演説するほか、生き延びる希望がない、と告げられた床屋は、ヒンケルになりかわって語り始める。たどたどしく、ためらいながらも、やがて力強く。床屋は独裁主義に代わる民主主義を、人種差別と排除の論理に対して共生と希望を説く。一人二役の演説、その声、その音、ユダヤ人の言葉の意味するために、チャップリンが決然とオール・トーキーを採用したかのようである。

戦時下の内地で『独裁者』を見ることはできなかった。1960年に解禁された際に、「太平洋戦争中に、ジャワとかシンガポールとかの南方諸地域でこの映画を見た」人たちがいた、「日本国内ではタブーであったこの映画を、当時“大東亜共栄圏”的に南方に派遣された人々が現地で見ることができたということは、これらの人々が、国内ではもち得なかった自由を、たとえわずかであっても南方の占領地域でもつことができた」ということだと、江藤文夫・並木康彦・福田定良共同執筆「戦前から戦後へ——チャップリンの『独裁者』との対話」（『中央公論』1960年10月）



『独裁者』DVDパッケージ  
(パイオニア LDC販売、2000年)

は証言している。そして次のように分析する。

『独裁者』の中には、二人のチャップリンがいる。役の上で彼は一人二役である。一方で彼は独裁者ヒンケルであり、他方で彼はユダヤ人の床屋である。だが、さらに厳密にいうなら二人のチャップリンとは、サイレント・チャップリン（マイムのチャップリン）とトーキー・チャップリンとがこの作品の中に存在しているということである。

マイムのチャップリンとトーキーのチャップリンの葛藤と笑いを通じて、「声」は意味あるものとして立ちあがる。

留学中のアメリカで、リアルタイムにこの映画を見た鶴見俊輔は、再見して、以前よりさらにひきつけられたという。「満洲事変以来の十五年の戦争について、日本は、加害者・被害者両方をわらうことのできる映画を、まだもっていない」（鶴見俊輔「チャップリンの独裁者 作家としての技倆・政治家としての技倆」『映画評論』1960年10月）というのである。戦争映画と笑いについて考えさせられる。